正量部の不動業説

並　川　孝　儀

1　はじめに

インド部派仏教史上，18或いは20部もの多数の部派が存在したと伝えられる中，特に説一切有部，大衆部と並んで一つの有力な部派と見做される正量部は，その勢力を比較的後代にいて増大せしめた部派と言われる。しかし，説一切有部などに比較して，その残存資料の過少の理由によって正量部の実態は殆ど不明なままであり，更にそのことは部派仏教史における正量部の歴史的事実を解明する障害ともなっているのが現状である。残存している単独の文献と言えば，『三彌底部論』三巻（失訳）と『律二十二明了論』一巻（真諦訳）の一論書，一小律に過ぎず，その他断片的には，『論事』や『異部宗輪論』を始めとする若干の資料によって知るに止まる。このような状況の中，正量部の研究は，資料が比較的残存している理由から補特伽羅論や不失壊を中心とした特定の思想内容に限定され，その他の教理に関しては全く体系的に論じられることはなかった。

そこで，筆者は正量部を研究するに当たり，補特伽羅説以外の従来明らかにされていなかった正量部の種々なる思想を伝える資料として，チベット語訳のみに現存する一資料を提示し，もって未知の正量部の諸説を明らかにしたい。

この文献は『有為無為決択』と言われるもので，Daśabalaśrīmitra (Stobs bcu dpal bśes gñen) 作になる

チベット語訳：'dus byas daṅ 'dus ma byas rnam par ṅes pa

梵語題名：saṃskṛtāsaṃskṛta-viniścaya（以下 SAV）

である。[1]

SAV は全35章より成るが，その中，部派仏教関係では毘婆沙師の説（第２章～第12章）と南方上座部（第13章～第15章）が紹介され，その後に正量部の諸説が説示される。

ここで，正量部関係の記述を以下に示す。尚，数字はデルゲ版（Ha）[2] と北京版（Ño）[3] の箇所である。

第16章「非随眠決択」	ananuśaya-viniścaya	(Ha) 205 a 5	(Ño) 127 a 3
第17章「随眠決択」	anuśaya-viniścaya	212 a 6	137 a 4

第18章「非福決択」	apuṇya-viniścaya	215 a 1	140 b 8
第19章「福決択」	puṇya-viniścaya	220 a 5	148 a 6
第20章「不動業決択」	āniñjyakarma-viniścaya	224 a 3	153 a 3
第21章「聖諦決択」	āryasatya-viniścaya	225 b 2～241 a 5	154 b 8～174 b 8

これら以外にも他章において断片的に正量部説が見られる[4]，これらの中，「非随眠決択[5]」，「随眠決択[6]」，「非福決択[7]」，「福決択[8]」は既に公にしており，本小論では「不動業決択[9]」について眺め，正量部の説く不動業説の一端を考察する。

2　SAV 第20章「不動業決択」の梗概

先ず，最初に正量部の不動業説が詳述される SAV 第20章「不動業決択」の説示内容の梗概を以下に表示する。尚，デルゲ版（D）と北京版（P）の箇所を付す。

		D.	P.
〔1—1〕	不動業の定義	112—3—3 (224 a 3)	63—3—3 (153 a 3)
〔1—2〕	不動業と相応するもの	112—3—3 (224 a 3)	63—3—4 (153 a 4)
〔2〕	有動における三昧の災患	112—3—4 (224 a 4)	63—3—6 (153 a 6)
〔3—1〕	福業と欲界の四洲	112—3—6 (224 a 6)	63—3—8 (153 a 8)
〔3—2〕	福業と六欲天	112—4—2 (224 b 2)	63—4—4 (153 b 4)
〔4—1〕	福業と色界初禅天	112—4—3 (224 b 3)	63—4—5 (153 b 5)
〔4—2〕	福業と色界第二禅天	112—4—4 (224 b 4)	63—4—7 (153 b 7)
〔4—3〕	福業と色界第三禅天	112—4—4 (224 b 4)	63—4—8 (153 b 8)
〔4—4〕	不動業と色界第四禅天	112—4—5 (224 b 5)	63—4—8 (153 b 8)
〔5〕	不動業と無色界天	112—4—7 (224 b 7)	63—5—4 (154 a 4)
〔6〕	後有を生じる因となる業	113—1—2 (225 a 2)	63—5—6 (154 a 6)
〔7—1〕	後有に関する二種の業	113—1—4 (225 a 4)	64—1—2 (154 b 2)
〔7—2〕	後有を生じる八種の業	113—1—5 (225 a 5)	64—1—3 (154 b 3)
〔7—3〕	後有を生じない八種の業	113—1—7 (225 a 7)	64—1—5 (154 b 5)
〔8〕	結語	113—2—2 (225 b 2)	64—1—7～8 (154 b 7～8)

以上が「不動業決択」章における説示内容の概要である。

3　SAV 第20章「不動業決択」の説示内容

正量部説は，上記の如く6章に区分され紹介されているが，その中「不動業決択」は，「福決択」と「非福決択」との組合せで説示されている。この第18，19，20章に見られる非福，福，不動業という三種の分類は，阿含・ニカーヤに既に見出せるが，論の時代に入ると，北伝では『法蘊足論』，『舎利弗阿毘曇論』，『倶舎論』，『順正理論』など，南伝では Vibhaṅga,

Visuddhimagga や註釈文献など種々なる文献で論じられる。しかし，これらの諸文献ではこの三種の分類は，他の種々なる業分類と比較して，それほど主要な意味をもって取り扱われていたとは思われない。その点，SAV が福，非福，不動業の三種を正量部の業説として紹介するその構成より考察する時，正量部においては業を論じる場合，この三種が業の重要な分類としてその位置を占めていたのではないかと推測できるのである。

(1) 不動業の定義

不動業の定義は，第18章「非福決択」の最初の部分に福と非福と共に一括し明示されているので，それを先ず見たい。

de la ñon moṅs pa'i rgyu / las la rnam pa gsum ste // 'di lta ste / bsod nams daṅ / bsod nams ma yin pa daṅ / mi gyo ba'o //

de la bsod nams ma yin pa ni / 'dod pas bsdus pa'i ñon moṅs pa can la rnam pa gsum ni 'di ltar / lus kyi daṅ / ṅag gi daṅ / sems kyi'o // 'di ni bsod nams ma yin pa'i las kyi tshul mdor bsdus pa'o // de la bsod nams ma yin pa ni mi gtsaṅ ba daṅ ma dag pa daṅ mi dge ba'o //

bsod nams ni rnam pa gñis te / 'di ltar / 'dod pa'i khams pa daṅ / gzugs kyi khams pa'o // 'dod pas bsdus pa'i las la rnam pa gñis ni 'di lta ste / dge ba'i las daṅ sgrib pa ma yin pa'i las so // gzugs kyis bsdus pa yaṅ gñis te / 'di lta ste / dge ba daṅ / sgrib pa ma yin pa'o // 'di gñig yaṅ sgom pa'i raṅ bźin te / gaṅ na dbugs 'byuṅ 'jug yod pa na yod do // 'di ni bsod nams kyi las kyi tshul mdor bsdus pa'o // bsod nams ni gtsaṅ ba daṅ / dag pa daṅ/dge ba'o //

gaṅ na sgom pa'i raṅ bźin gyi las dbugs 'byuṅ 'jug gi dṅos po med pa de ni mi gyo ba'i las so // 'di ni mi gyo ba'i las kyi tshul mdor bsdus pa'o // spyod par bya ba med pas mi gyo ba'i las so // (D. 215 a 6～b 3, P. 141 a 7～b 5)

そこで，煩悩の原因である業には三種がある。即ち次の如しである。福と非福と不動〔業〕である。

この中，非福は欲界に属する汚染に三種がある。即ち次の如しである。身〔業〕と口〔業〕と心〔業〕とである。これは非福の業の在り方を略説したものである。そこで，非福とは不浄と不清浄と不善である。

福は二種である。即ち次の如しである。欲界と色界である。欲〔界〕に属する業における二種とは，次の如しである。善業と無覆の業である。色〔界〕に属する〔業〕も二種である。即ち次の如しである。善〔業〕と無覆〔の業〕である。この二種は，また修習の自性であり，気息の出入があるところに存在するのである。これは福の業の在り方を略説したものである。福は浄と清浄と善である。

修習の自性の業である気息の出入なきものとなるのが，不動の業である。これは不動の業の在り方を略説したものである。作用がなされないことによって不動の業なのである。

更に，この少し後に，

bsod nams ma yin pa daṅ bsod nams dag gi rgyu ni rnam par śes pa'i tshogs drug ka'o //'di lta ste/mig gi rnam par śes pa nas yid kyi rnam par śes pa'i bar du'o // mi gyo ba'i rgyu mi yid kyi rnam par śes pa kho na'o //

(D. 215 b 4～5, P. 141 b 8～142 a 1)

非福と福の因は六識すべてである。即ち次の如しである。眼識から意識までである。不動〔業〕の因は意識のみである。

と，定義されている。

第20章「不動業決択」においては，上記の定義が更に詳細に規定されている。

不動業は心性である。それは，また第四禅と相応するものであり，有漏の無色〔界〕の四つの定（sñoms par 'juk pa）と相応するものであり，第四禅と無色〔界〕の定と力が相似する定と相応するものであり，それが不動業であると知られるべきである。そこでは，尋（rnam par rtog pa）などが生じることがないことによって，また不動〔業〕なのである。

また，動（gyo ba）ということをなすことは，三昧の災患（skyon）があり，それは七種[10]である。次の如しである。即ち，尋と伺（rnam par spyod pa）と喜（dga' ba）と楽（bde ba）と入〔息〕（'jug pa）と出〔息〕（byuṅ ba）である。

第四禅と無色〔界〕は，それら〔七種の災患〕が生じることがないことによって，不動〔業〕なのである。（D. 224 a 3～5, P. 153 a 3～7）

このことから，正量部の不動業説を纏めると，

(1) 不動業の因は意識のみであり，即ち心性である。

(2) 尋，伺などの災患が生じることはなく，作用がない。

(3) 色界第四禅と無色界の四つの定と相応する。

の3点から規定されていることが判明する。

これより，この正量部の不動業説が如何なる立場にあるのかを考察するために他の文献に見られる不動業説を眺めて見る。

先ず，『法蘊足論』に

云何不動行。謂四無色定。諸有漏善。是名不動行[11]。

と，不動行とは四無色界定の有漏の善である，として，更に

於空無辺処天，繫心稀求。彼作是念，願我当生空無辺処天衆同分中。因此稀求，勤修加行，超諸色想，滅有対想，不思惟種種想，入無辺空，空無辺処具足住。於此定中，諸思等思現前，等思已思当思，思性思類造心意業，名不動行[12]。

と，ある。これは十二因縁を解説する中，無明を縁としてどのように不動行を造るのか，また不動行をなして，どのように不動行に随う識があるのかという点を論じるところで説示される。ここでは，加行を勤修して色想を超え，有対想を滅し，種々なる想を思惟せず，無辺の空に入り，この空無辺処天の定における諸の思，等思……思の類，造心意業が不動行であると定義される。この後半の定義は福行などには見られないものである。

『倶舎論』では，福などの三業を論じるところで，次の如く説示される。

> 欲界における善業が福であり，〔不善業が非福であり，〕それより上界において生じた〔業〕が不動〔業〕である。[13]

この kārikā の定義を，長行釈では「色，無色界に属する善業」と明示する。これに関し，色界第三禅までは有動である，と聖教に説かれている[14]ではないかとの疑問を挙げ，それに対して，一方ではどうして色，無色界に属するあらゆるすべての善業は不動である，と説かれたかと言えば，即ち不動に順じて導く道行である[15]，と『不動経[16]』の教えを挙げ，2つの見解を示している。この点について，『倶舎論』は第3章において三災を説く中で，有動の災患に関して色界初禅では尋，伺が，第二禅では喜が，そして第三禅では入息，出息が災患となるが，第四禅でに不動なるが故に災患を離れるのである，と解釈している[17]。この記述を見ると，世親の見解は結局のところ色界第三禅までは有動であり，第四禅が不動であるとの立場である。このことから，「色界，無色界に属する善業」は，厳密に言えば「色界第四禅と無色界に属する善業」を不動業と考えているようである。

また，『倶舎論』では，不動業に関して有動の業が無動の異熟を導くかどうかという視点より論じられる。そこでは

> 色〔界〕，無色界に属する業が，或る地に属するものならば〔それと異なった〕他の地において異熟することは全くあり得ない。それ故に，異熟が確定していることから不動である，と言われるのである。[18]

と，説かれている。

また，他に『倶舎論』では，十二因縁を説くところで不動業に関して

> 自ら楽のために或い不苦〔不楽〕のために，身などによって三種の業を起こす。即ち，やって来る楽のために福を，楽と不苦不楽のためには不動を，〔そして〕現世の楽のためには非福を起こす。[19]

と，不動〔業〕を楽と不苦不楽のために身などの業を起こすものである，と規定している。この記述に関して，称友は「第三禅までは楽のために色界に属する善〔業〕を，であって，それより上は不苦不楽のためにである。[20]」と，解釈している。

次に，『舎利弗阿毘曇論』における不動業の記述を見ると，それは十二因縁に関する諸説を解説する中，どのように無明を縁として不動行が現世に行ずるのかという点から論じられる。ここに，空無辺処に関する記述を示せば，

云何不動行。若人無慧無明未断，離一切色想，滅瞋恚想，不思惟若干想，成就無辺空処行。彼身業無教戒法入摂意識所知。口業無教戒法入摂意識所知。意業由意生受想思触思惟，如是身口意善行，是名不動行無明縁現世行。[21]

とあり，上記の『法蘊足論』とほぼ同様の定義がなされており，不動業は無色界の四定における身口意の善業であると説かれる。

これより，南方上座部所伝の不動行説を眺めるが，[22] Visuddhimagga に

福行は，布施と戒などによって起こる八種の欲界の善思と，修習の力によって起こる五種の色界の善思と十三の思（cetanā）である。非福行は，殺生などによって起こる十二種の不善思である。不動行は，修習の力によって起こる四種の無色界の善思である。[23]

とあり，不動行は，修習によって起こる無色界の四種の善思と規定される。

以上，不動行に関して諸説を眺めたが，ここで SAV に説かれる正量部の不動業説を他と比較してその特色を考察する。上記の(1)不動業の因は意識のみで，心性である，という説に対し，それに対応する説は『法蘊足論』に見られるが，それ以外の文献には不動業のみが心性であるという記述は見られない。(2)不動業は尋，伺などの有動の災患が生じない，という説に関し，『法蘊足論』，『舎利弗阿毘曇論』は不動業を四無色界定と規定しているから当然同じ説となり，また『倶舎論』にも同一の説が見られる。(3)不動業は色界第四禅と無色界定と相応する，という説に対し，『法蘊足論』，『舎利弗阿毘曇論』及び Visuddhimagga は四無色界定とのみ相応すると説き，『倶舎論』では一応定義として色界と無色界の二界と相応すると説いているが，厳密には色界第四禅を不動とすることから SAV に見られる正量部説は，『倶舎論』と同一の説であることが判明する。

(2) 欲界の十処と色界天

SAV では，続いて福業の修習によって生じる欲界の四洲に関して説示される。即ち，

ここで，雑染でない業であるものなどが説かれるのである。福のその業の故に，四洲に住する人々を生じるのである。次の如くである。即ち，無貪を修習する（yoṅs su bsgoms pa）福〔の業〕の故に，北倶盧洲の人〔々を生じるの〕である。それによって，それ〔らの人々〕は貪著がなく，そしてすべての受用（ñe bar loṅs spyod ba）を獲得するのである。無瞋を修習する〔福の業の〕故に，東勝身洲〔の人々を生じるの〕である。それによって，それら〔の人々〕は諸々の生き物を殺さないのである，と言われるのである。無慢を修習する福〔の業〕の故に，西牛貨洲〔の人々を生じるの〕である。それによって，そこには同一性（rigs gcig ñid）がある。それら〔の人々〕は等しい量と形を具足するのである。無痴を修習する福〔の業〕の故に，南贍部洲〔の人々を生じるの〕である。それによって，それら〔の人々〕は思念（dran pa）と智慧（blo）を得て，心を具足するのである。（D. 224 a 6～b 2, P. 153 a 8～b 4）

ここでは，無貪を修習すれば北倶盧洲に，無瞋を修習すれば東勝身洲に，無慢を修習すれば西牛貨洲に，そして無痴を修習すれば南贍部洲に生じる，との如く所謂三善根と無慢の修習と，それによって生じる欲界の善趣である四洲との関係を示している。この説示は，第18章「非福決択」[24]で，瞋恚によって地獄に，貪りによって餓鬼に，痴によって畜生に，そして慢によって阿修羅に生じる，との如く，同様に三不善根と慢とによって四悪趣に生じる因が説かれる。このように，四洲や四悪趣に生じる因として三善（不善）根と無慢（慢）によって説示される例は他に見られない正量部特有の説のようである。

次に，SAV は六欲天を略説した後，福業によって色界天に生じる記述が続く。そこには，色界初禅では順次梵輔天，梵種天，梵衆天に，第二禅では少光天，無量光天，極光浄天に，そして第三禅では少浄天，無量浄天，遍浄天に生じる，と説かれる。この中，初禅の三天，即ち梵輔天（tshaṅs pa'i mdun na 'don gyi lha, brahmapurohita），梵種天（tshaṅs ris kyi lha, brahmakāyika），梵衆天（tshaṅs 'khor gyi lha, brahmapāriṣadya）は，『倶舎論』の梵衆天，梵輔天，大梵天（mahābrahmāṇa）の三天説や，その他の説に比較し，見ることのできない正量部独自の説と言える。

この色界第三禅天に続いて，不動業が相応する色界第四禅が説かれる。その記述を示すと以下の如くである。

> 不動業は，また第四禅と各々に相応する劣と中と勝〔の三地〕から〔言えば，無雲天と福生天と〕広果天〔に生じるの〕である。〔更に〕不動業は第四禅と相応するものと，〔七〕覚支を修習すること，それに付随すること（'khor）を信じる根（信根）の故に，善現天〔に生じるの〕である。その〔七覚支を修習すること〕と，それに付随することを精進する根（精進根）の故に，善見天〔に生じるの〕である。その〔七覚支を修習すること〕と，それに付随することを思念する根（念根）の故に，無煩天〔に生じるの〕である。その〔七覚支を修習すること〕と三昧する根（定根）に付随することの故に，無熱天〔に生じるの〕である。その〔七覚支を修習すること〕と，それに付随することを智る根（慧根）の故に，色究竟天〔に生じるの〕である。各々の衆人は，第四禅と相応する不動業の故に，無想有情に生じるのである。（D. 224 b 5～7, P. 153 b 8～154 a 4）

ここには，七覚支の修習と，信，精進，念，定，慧の所謂五根によって各々善現天，善見天，無煩天，無熱天と色究竟天に生じる，と規定されている。そして，これらの天に生じる人々は，第四禅と相応する不動業の故に無想有情に生じる，とされる。この七覚支，五根による説示は，他の文献に見られず正量部特有のものであると言える。ここで，正量部が説く17種の色界天を纏める。

〔初禅〕梵輔天・梵種天・梵衆天

〔二禅〕少光天・無量光天・極光浄天

〔三禅〕少浄天・無量浄天・遍浄天

〔四禅〕(無雲天)・(福生天)・広果天・善現天・善見天・無煩天・無熱天・色究竟天

(3) 三業と後有の因

SAV では続いて，上述の業はすべての生を起こすのではなく，貪欲を伴う福，非福，不動の三業が後有を生じる因となる，と説く。その部分を示すと以下の如くである。

それでは，〔上で〕説かれたように，それらの業はすべての生 (skye ba) を生起せしめるものであるのかと言えば，そうではないのである。即ち，貪欲を伴う業である福，非福，不動それらは，後有 (yaṅ srid) を生じる因となるのである。貪欲を離れるのは，同一界においてである。即ち，次の如くである。欲〔界〕に属する業は，欲〔界〕に関する生〔を生起せしめるもの〕である。同様に，色〔界〕に属する〔業〕は，色〔界〕に関する生〔を生起せしめるもの〕である。無色〔界〕に属する〔業〕は，無色〔界〕に関する生〔を生起せしめるもの〕である。〔起こり〕来ること (bgrod pa) を増長する業それは後有を生起せしめるものである。その障礙となる業は，〔後有を生起せしめ〕ないのである。(D. 225 a 2～4, P. 154 a 6～b 1)

ここに説示された，貪欲を伴う三業が後有の因となる，という点などに関しては，『順正理論』(『顕宗論』も同じ) に同様の記述が見られる。これは『倶舎論』における三業の説明を更に増補した中に見られる。その増補部分を示すと，

応知此中由於因果相属愚故造非福業。以非福業純染汚故，要依麁重相続無明。由此無明現在前位，不能解-信因果相属，是故発-起諸非福行。由真実義愚故造福及不動業。真実義者，謂四聖諦。若於彼愚諸異生類，於善心位亦得間起。由此勢力令於三界，不如実知其性皆苦，起福不動行為後有因。若已見諦者則無是事。乗先行力漸離染時，如次得生欲色無色。

である。これに依れば，福と不動行を起こして後有の因となすのであり，そして先の行の力に乗じて染を離れる時，欲，色，無色の三界に生じるのである。これは，正量部が非福も後有を生じる因とする説とは異なった見解である。

次に，後有の生，不生に関して，〔起こり〕来ることを増長する業は後有を起こし，その障礙となる業は後有を起こさないという二業説が述べられる。この二業は各々8種に分類される。前者の8種は，欲界に属する善と無覆と不善と有覆，色界に属する善と無覆，そして無色界に属する善と無覆であり，後者の8種は，夢の中の業，有の中の業，童子の間になしたこと，全智が生じたこと，無漏，自性が無記であること，貪りを離れることによって積集したこと，そして色界と無色界の修習の自性がない業である。この二業説は，他の文献に見られず，正量部特有の見解であるように思われる。

以上が，SAV 第20章「不動業決択」の説示内容を纏めたものである。

4　SAV に引用される原典

SAV の記述形式は，Daśabalaśrīmitra による正量部説の内容毎の説示がなされた後に，その内容を纏める形で正量部の原典が引用され，論を進めるといった構成より成っている。引用部分には，その原典が何であるのか文献名は明示されていないが，どれもが7音節からなる偈文であり，kārikā からの訳出と考えられ，恐らく同一文献からの引用と推測できる。[28] 引用される時は，yaṅ gsuṅs pa「……」źes so，或いは yaṅ「……」źes gsuṅs so という定型句で表示される。

これより，ここで SAV 第20章「不動業決択」中に見られる或る正量部の原典からの引用文を纏めて，以下に挙げる。

mi gyo sems pa ñid du 'dod //
bsam gtan bźi pa daṅ gzugs med //
mtshuṅs ltan de 'dra'i stobs sñoms kyis //　(D. 224 a 5～6, P. 153 a 7～8)

de phyir bsod nams las mi kun //
'dod na spyod pa'i lha drug daṅ //
de bźin daṅ po'i bsam gtan gsum //
mi gyo ba las lhag ma'i lha //　(D. 225 a 1～2, P. 154 a 5～6)

bgrod pa 'phel daṅ chags bcas pa'i //
las de mtshuṅs pa'i khams rnams su //
yaṅ srid ljon śiṅ sa bon rgyu //　(D. 225 a 4, P. 154 b 1)

'dod skyes bźi daṅ gzugs skyes gñis //
gñis ni gzugs med skyes pa'o //　(D. 225 a 6～7, P. 154 b 4～5)

rmi lam bar srid rnam mi śes //
yoṅs śes skyes daṅ zag med daṅ //
raṅ bźin luṅ med ma chags bsdus //
gzugs daṅ gzugs med lam ma yin //　(D. 225 b 1～2, P. 154 b 6～7)

5　チベット語訳 SAV 第20章「不動業決択」和訳

ここに，SAV 第20章「不動業決択」の和訳を試みるが，使用した版本はデルゲ版と北京版

である。訳中の注意すべき術語についてはチベット語を付すことにする。

〔和訳〕

(D. 224 a 3, P. 153 a 3) 不動業は心性である。それは，また第四禅と相応するものであり，有漏の無色〔界〕の四つの定 (sñoms par 'juk pa) と相応するものであり，第四禅と無色〔界〕の定と力が相似する定と相応するものであり，それが不動業であると知られるべきである。そこでは，尋 (rnam par rtog pa) などが生じることがないことによって，また不動〔業〕なのである。

また，動 (gyo ba) ということをなすことは，三昧の災患があり，それは七種である。次の如くである。即ち，尋と伺 (rnam par spyod pa) と喜 (dga' ba) と楽 (bde ba) と入〔息〕('jug pa) と出〔息〕(byuṅ ba) である。

第四禅と無色〔界〕は，それら〔七種の災患〕が生じることがないことによって，不動〔業〕なのである。

〔また説かれる。〕

不動〔業〕は心性を欲する。第四禅と無色〔界の定〕と相応し，それと相似する力〔のある〕定と〔相応する。〕

と，説かれている。

ここで，雑染でない業であるものなどが説かれるのである。福のその業の故に，四洲に住する人々 (P. 153 b) を生じるのである。次の如くである。即ち，無貪を修習する (yoṅs su bsgoms pa) 福〔の業〕の故に，北倶盧洲の人〔々を生じるの〕である。それによって，それ〔らの人々〕は貪著がなく，そしてすべての受用 (ñe bar loṅs spyod ba) を獲得するのである。無瞋を修習する〔福の業の〕故に，東勝身洲〔の人々を生じるの〕である。それによって，それら〔の人々〕は諸々の生き物を殺さないのである，と言われるのである。無慢を (D. 224 b) 修習する福〔の業〕の故に，西牛貨洲〔の人々を生じるの〕である。それによって，そこには同一性 (rigs gcig ñid) がある。それら〔の人々〕は等しい量と形を具足するのである。無痴を修習する福〔の業〕の故に，南贍部洲〔の人々を生じるの〕である。それによって，それら〔の人々〕は思念 (dran pa) と智慧 (blo) を得て，心を具足するのである。

欲界天は六である。即ち，次の如くである。〔四〕天王衆から他化自在天まで〔であり〕，それら〔の人々〕は，また無痴を多く修習する〔福の業の〕故に，〔それらの〕天〔に生じるの〕である。福の業の故に，形と座と大宮殿などが出現するのである。

〔色界〕初禅の劣と中と勝の福を修習する故に，初禅の劣と中と勝の三地がある。即ち，順次に梵輔天 (tshaṅs pa'i mdun na 'don gyi lha) と梵種天 (tshaṅs ris kyi lha) と梵衆天 (tshaṅs 'khor gyi lha) に生じるのである。それと同様に，第二禅の三〔地〕について〔言えば〕，少光天 ('od chuṅ gi lha) と無量光天 (tshad med 'od kyi lha) と極光浄天 ('od gsal gyi lha) に生じるのである。同様に，第三禅の三〔地〕について〔言えば〕，少浄〔天〕(dge

chuṅ）と無量浄〔天〕(tshad med dge) と遍浄天 (dge rgyas kyi lha) に生じるのである。

不動業は，また第四禅と各々に相応する劣と中と（P. 154 a）の勝〔の三地〕から〔言えば，無雲天と福生天と〕，広果天 ('bras bu che ba'i lha)〔に生じるの〕である。〔更に〕，不動業は第四禅と相応するものと，〔七〕覚支を修習することと，それに付随すること ('khor) を信じる根（信根）の故に，善現天 (gya nom snaṅ gi lha)〔に生じるの〕である。その〔七覚支を修習すること〕とそれに付随することを精進する根（精進根）の故に，善見天 (śin tu mthon ba'i lha)〔に生じるの〕である。その〔七覚支を修習すること〕とそれに付随することを思念する根（念根）の故に，無煩天 (mi che ba'i lha)〔に生じるの〕である。その〔七覚支を修習すること〕と三昧する根（定根）に付随することの故に，無熱天 (mi gduṅ ba'i lha)〔に生じるの〕である。その〔七覚支を修習すること〕とそれに付随することを智る根（慧根）の故に，色究竟天 ('og min gyi lha)〔に生じるの〕である。各々の衆人は，第四禅と相応する不動業の故に，無想有情 ('du śes med pa'i sems can) に生じるのである。

空〔無辺処と〕，識〔無辺処〕と，無所有処と，非想非非想処と各々に相応する不動（D. 225 a）業の故に，順次に四無色〔界に生じるの〕である。その様に，それら欲〔界〕と色〔界〕と無色〔界〕の三界とも，それらは業から生じた有身が生じる拠り所である。

また，〔説かれる。〕

> その故に，福の故に，すべての人は欲界の六天と，同様に〔色界の〕最初の三禅〔と，そして〕不動業の故に，それ以外の天〔に生じるの〕である。

と，説かれている。

それでは，〔上で〕説かれたように，それらの業はすべての生 (skye ba) を生起せしめるものであるのかと言えば，そうではないのである。即ち，貪欲を伴う業である福，非福，不動それらは，後有 (yaṅ srid) を生じる因となるのである。貪欲を離れるのは，同一界においてである。即ち，次の如くである。欲〔界〕に属する業は，欲〔界〕に関する生〔を生起せしめるもの〕である。同様に，色〔界〕に属する〔業〕は，色〔界〕に関する生〔を生起せしめるもの〕である。無色〔界〕に属する〔業〕は，無色〔界〕に関する生〔を生起せしめるもの〕である。〔起こり〕来ること (bgrod pa) を増長する業（P. 154 b）それは後有を生起せしめるのである。その障礙となる業は〔後有を生起せしめ〕ないのである。

また，〔説かれる。〕

> 〔起こり〕来ることを増長し，そして貪りを伴うその業と相応する〔三〕界においては，後有が樹木で種子が因〔の如く〕である。

と，説かれている。

業に二種があることは，次の如くである。即ち，後有が生じる際，力性によって〔起こり〕来ることを増長する業と，通常〔ことを〕なす時に，異熟が生じてから後有を造作する際，力がない故にその障礙となる業である。

その中，〔起こり〕来ることを増長する業は八〔種〕である。即ち，次の如くである。欲〔界〕に属する善と無覆と不善と有覆と，色〔界〕に属する善と無覆と，無色〔界〕に属する善と無覆である。

また，〔説かれる。〕

欲〔界〕に生じた四と，色〔界〕に生じた二で，〔更に〕二は無色〔界〕に生じたものである。

と，説かれている。

その障礙となる〔業〕は八〔種〕である。即ち，次の如くである。夢の中の業と，有（srid pa）の中の業と，童子の間になしたことと，全智（yoṅs su śes pa）が生じたことと，無漏と，自性が無記〔であること〕と，（D. 225 b）貪りを離れることによって積集したことと，色〔界〕と無色〔界〕の修習の自性がない業である。

また，〔説かれる。〕

夢の中，有相，童子，全智が生じたことと，無漏と，自性が無記と，無貪に含まれたことと，色〔界〕と無色〔界〕の道がないことである。

と，説かれている。

〔以上は〕比丘である尊師 Daśabalaśrīmitra 大師によって著された『有為と無為の決択』の中，〔聖一切所貴部の聖典の教法中の〕「不動業決択」と名付ける第20章である。（D. 225 b 2, P. 154 b 8）

6　チベット語訳 SAV 第20章「不動業決択」テキスト

デルゲ版（D）Ha, 224 a 3—225 b 2
北京版　（P）Ño, 153 a 3—154 b 8

（D. 224 a 3, P. 153 a 3）mi gyo ba'i las ni sems pa ñid do // de yaṅ bsam gtan bźi pa daṅ mtshuṅs par ltan pa daṅ / gaṅ dag zag pa daṅ bcas pa'i gzugs med pa'i sñoms par 'jug pa bźi daṅ mtshuṅs par ltan pa daṅ / gaṅ dag bsam gtan bźi pa daṅ gzugs med pa'i sñoms par 'jug pa daṅ stobs mtshuṅs pa'i sñoms par 'jug pas mtshuṅs par ltan pa de mi gyo ba'i las su rig par bya'o // de la rnam par rtog pa la sogs pas bskyed① par bya ba ma yin pas na 'di ni mi gyo ba'o // de yaṅ gyo ba źes bya ba ni tiṅ ṅe 'dzin gyi skyon te / de yaṅ rnam pa bdun no // 'di lta ste / rnam par rtog pa daṅ / rnam par dpyod② daṅ / dga' ba daṅ / bde ba daṅ / 'jug pa daṅ / byuṅ ba'o // bsam gtan bźi pa daṅ gzugs med pa ni de rnams kyis bskyod③ par bya ba ma yin pas na mi gyo ba'o //

mi gyo sems pa ñid du 'dod //
bsam gtan bźi pa daṅ gzugs med //
mtshuṅs ltan de 'dra'i stobs sñoms④ kyis //

źes⑤ gsuṅs so // gaṅ 'dir ñon moṅs pa can ma yin pa'i las de rnams gsuṅs so // bsod nams kyi las de las / glin bźi la gnas pa'i mi rnams (P. 153 b) su skye'o // 'di lta ste / ma chags pa yoṅs su bsgoms pa'i bsod nams las byaṅ gi sgra mi sñan gyi mi'o // des na 'di ni yoṅs su 'dzin pa med pa daṅ / ñe bar loṅs spyod ba thams cad phun sum tshogs pa'o // źe sdaṅ med pa yoṅs su bsgoms pa las śar gyi lus 'phags pa'o // de ñid kyis na rnams ni srog chags rnams mi gsod⑥ do źes so // ṅa rgyal med pa (D. 224 b) yoṅs su bsgoms⑦ pa'i bsod nams las nub kyi ba laṅ spyod pa'o // de ñid kyis na de ru rigs gcig ñid do // de rnam ni tshad daṅ gzugs mñam pa ñe bar ldan pa'o // ma rmoṅs pa yoṅs su bsgoms⑧ pa'i bsod nams las 'dzam bu gliṅ pa'o // de ñid kyis na de rnams ni dran pa daṅ blo phun sum tshogs śiṅ⑨ sems pa daṅ ldan pa'o // 'dod pa na spyod pa'i lha drug go / 'di lta ste / rgyal chen ris nas gźan 'phrul dbaṅ byed kyi bar du / de ni yaṅ ma rmoṅs pa maṅ du yoṅs su goms pa las lha'o // bsod nams kyi las las dbyibs daṅ gdan daṅ gźal yas khaṅ la sogs pa 'byuṅ bar 'gyur ro // bsam gtan daṅ po'i dman pa daṅ 'briṅ daṅ mchog gi bsod nams bsgrubs pa las / bsam gtan daṅ po'i dman pa daṅ 'briṅ daṅ gya nom pa'i sa gsum ste⑩ / rim pa bźin du tshaṅs pa'i mdun na 'don gyi lha daṅ / tshaṅs ris kyi lha daṅ / tshaṅs 'khor gyi lha rnams su skye'o // de kho na bźin du bsam gtan gñis pa'i gsum du / 'od chuṅ gi lha daṅ / tshad med 'od kyi lha daṅ / 'od gsal gyi lha rnams su bar 'gyur ro // de bźin du bsam gtan gsum pa'i gsum du / dge chuṅ daṅ tshad med dge daṅ⑪ dge rgyas kyi lha rnams su skye'o // mi gyo ba'i las kyaṅ bsam gtan bźi pa daṅ so sor ldan pa'i dman pa daṅ 'briṅ daṅ (P. 154 a) mchog las 'bras bu che ba'i lha rnams so // mi gyo ba'i las bsam gtan bźi pa daṅ ldan pa daṅ / byaṅ chub kyi yan lag rnams goms pa daṅ 'khor dad pa'i dbaṅ po las⑫ gya nom snaṅ gi lha'o // de ñid daṅ 'khor brtson 'grus kyi dbaṅ po las śin tu mthoṅ ba'i lha rnams so // de ñid daṅ⑬ 'khor dran pa'i dbaṅ po las mi che ba'i lha rnams so⑭ // de ñid daṅ tiṅ ṅe 'dzin gyi dbaṅ po'i 'khor las mi gduṅ ba'i lha rnams so // de ñid daṅ 'khor śes rab kyi dbaṅ po las 'og min gyi lha rnams so // so so⑮'i skye bo ni bsam gtan bźi pa daṅ ldan pa'i mi gyo ba las 'du śes med pa'i sems can du skye ba'o // nam mkha' rnam śes cuṅ zad med pa'i skye mched daṅ 'du śes med 'du śes med min gyi skye mched daṅ so sor ldan pa'i mi gyo ba'i (D. 225 a) las las rim pa bźin du gzugs med pa bźi'o / /de bźin du 'dod⑯ pa daṅ gzugs daṅ gzugs med pa'i khams gsum po de⑰ ni las las⑱ skyes pa'i lus can rnams skye pa'i rten yin no // yaṅ /

de phyir bsod nams las mi kun //

'dod na spyod pa'i lha drug daṅ //

de bźin daṅ po'i bsam gtan gsum //

mi gyo ba las lhag ma'i lha //

źes gsuṅs so //'o na ji ltar gsuṅs pa'i las de rnam ci thams cad kyi thams cad kyi skye ba skyed par byed pa yin nam źe na / ma yin te / de yaṅ / 'dod chags daṅ bcas pa'i las bsod nams bsod nams ma yin pa mi gyo ba de ni yaṅ srid skye ba'i rgur 'gyur ro //'dod chags daṅ bral ba'i ni khams mthun pa ru'o //'di lta ste / 'dod pas bsdus pa'i las 'dod bar gtogs pa'i skye ba'o // de bźin du gzugs kyis bsdus pa gzugs su gtogs pa'i'o // gzugs med pas brdus pa gzugs med pa'i'o // bgrod pa 'phel ba'i las (P. 154 b) de ni yaṅ srid skye bar byed pa'o // gegs de srid pa'i las ni ma yin no // yaṅ /

bgrod pa 'phel daṅ chags bcas pa'i //

las de mtshuṅs pa'i khams rnams su //

yaṅ srid ljon śiṅ sa bon rgyu //

źes gsuṅs so // las la rnam pa gñis ni 'di lta ste / yaṅ srid skyed pa la nus pa ñid kyis bgrod pa 'phel ba'i las daṅ /phel cher bya ba'i dus ñid du rnam par smin pa phyun nas yaṅ srid mṅon par 'du byed pa la nus pa med pa'i phyir gegs de srid pa'i las so // de la bgrod pa 'phel ba'i las ni brgyad de / 'di lta ste / 'dod pas bsdus pa'i dge ba daṅ / sgrib pa ma yin pa daṅ / mi dge ba daṅ / sgrib pa daṅ / gzugs kyis bsdus pa'i dge ba daṅ / sgrib pa ma yin pa daṅ / gzugs med pas bsdus pa'i dge ba daṅ / sgrib pa ma yin pa'o // yaṅ /

'dod skyes bźi daṅ gzugs skyes gñis //

gñis ni gzugs med skyes pa'o //

źes gsuṅs so // gegs de srid pa ni brgyad de / 'di lta ste / rmi lam naṅ gi las daṅ / srid pa bar ma'i las daṅ / byis pa'i gnas skabs su byas pa daṅ /yoṅs su śes pa skyes pa daṅ / zag pa med pa daṅ / raṅ bźin gyis luṅ ma bstan daṅ / (D. 225 b) chags bral gyis ñe bar bsags pa daṅ / gzugs daṅ gzugs med pa'i bsgom pa'i raṅ bźin ma yin pa'i las so // yaṅ /

rmi lam bar srid rnam mi śes //

yoṅs śes skyes daṅ zag med daṅ //

raṅ bźin luṅ med ma chags bsdus //

gzugs daṅ gzugs med lam ma yin //

źes gsuṅs so //

paṇḍita chen po dge sloṅ gnas brtan stobs bcu dpal ba śes gñen gyis bsdus pa 'dus byas daṅ 'dus ma byas rnam par ṅes pa la mi gyo ba'i las rnam par ṅes pa źes bya ba le'u ñi śu la'o // (D. 225 b 2, P. 154 b 8)

① D. bskyed P. skyed
② D. spyod P. dpyod
③ D. bskyod P. skyod
④ D. P. 共に ñams となっているが，ここでは sñoms と読む。
⑤ D. źes P. ces
⑥ D. gsod P. bsod
⑦ D. bsgoms P. sgroms
⑧ D. bsgoms P. goms
⑨ D. tshogs śiṅ P. tshogs pa'o //
⑩ D. ste P. te
⑪ D. tshad med daṅ / P. tshad med dge daṅ
⑫ D. las の後に kyaṅ がある。P. なし。
⑬ D. daṅ なし。P. daṅ あり。
⑭ D. so P. sa
⑮ D. so so'i P. so so
⑯ D. 'dod P. 'dad
⑰ D. de なし。P. de あり。
⑱ D. las las P. las la
⑲ D. ci P. ji
⑳ D. kyi なし。P. kyi あり。
㉑ D. nams の後に daṅ なし。P. daṅ あり。
㉒ D. 'di lta ste なし。P. 'di lta ste あり。
㉓ D. gtogs P. rtogs
㉔ D. bsgom P. sgom
㉕ D. dge sloṅ gnas brtan なし。P. にあり。
㉖ D. las P. la
㉗ D. ba'i las P. ba

〔註〕

(1) SAV の概要，作者，成立年代に関する詳細な研究には，P. Skilling 'The Saṃskṛtāsaṁskṛtaviniścaya of Daśabalaśrīmitra', *Buddhist Studies Review* 4—1 pp. 3—23 があり，これを参照されたい。

(2) SDE DGE TIBETAN TRIPIṬAKA BSTAN HGYUR（東京大学文学部所蔵版）中観部13 No. 3897 55—1—1 (Ha 109 a 1)～159—1—7 (317 a 7)。尚，最近刊行された台湾版では，Vol. 36 No 3902. 324—3—5～334—5—5

(3) TTP. Vol. 146 No. 5865 4—3—1 (Ño 5 b 1) ～110—3—3 (270 b 3).

(4) 他章で紹介される正量部説は，D. 126 a 7 P. 26 a 3, D. 131 a 4 P. 32a3, D. 135 b 3 P. 37 b 1, D. 139 b 6 P. 42 b 5, D. 310 a 6 P. 261 a 7 の5箇所に見られる。この中，第二番目は結集に関する記述であるが，これには P. Skilling 'History and Tenets of the Sāmmatīya School', '*Lihn-Son' Publication d'études bouddhologigues* No. 19 pp. 40—52 という論文がある。

(5) 拙稿「正量部の非随眠説—Saṃskṛtāsaṃskṛta-viniścaya 第16章—」『佛教大学研究紀要』74号 pp. 1—26。宮崎啓作「Stobs-bcu dpal bśes-gñen の正量部の随眠」『印仏研』29—1, pp. 20—1。

(6) 拙稿「正量部の随眠説—Saṃskṛtāsaṃskṛta-viniścaya 第17章—」『佛教大学研究紀要』71号 pp. 1—

18。

(7) 拙稿「正量部の非福説」『印仏研』40—2, pp. 1—11。

(8) 拙稿「正量部の福徳説—Saṃskṛtāsaṃskṛta-viniścaya 第19章—」『佛教大学研究紀要』75号 pp. 25—45。

(9) 宮崎啓作「Stobs-bcu dpal bśes-gñen の不動決択と名ずくる第二十品」『印仏研』28—2, pp. 148—9。この研究に多くを得たが，以後参照した点を一々断らなかったことを記しておく。

(10) テキストには七種となっているが，実際には六種しか挙げられておらず，恐らく七種は誤りであろう。

(11) 大正蔵26巻 p. 506・a。

(12) 大正蔵26巻 p. 506・c, 507・b。

(13) *Abhidharmakośabhāṣya* (AKBh) by P. Pradhan p. 227 l. 13. 大正蔵29巻 p. 81・a。他に『順正理論』29巻 p. 568・a。

(14) 『中阿含経』(192)「加樓烏陀夷経」大正蔵1巻 p. 743・a—b, Laṭukikopamasutta MN. Vol. I pp. 454—5。

(15) *Abhidharmakośavyākhyā* (KVy) by U. Wogihara p. 389 l. 3～p. 390 l. 2。

(16) 『中阿含経』(75)「浄不動道経」大正蔵1巻 p. 542・b—c, Āṇañjasappāyasutta MN. Vol. II, pp. 261—3。

(17) AKBh. p. 190 ll. 16—23, AKVy. p. 344 ll. 1—3。『倶舎論』大正蔵29巻 p. 66・c—67・a, 『順正理論』29巻 p. 527・a。これに関して，『倶舎論』第8章の頌においても，「第四禅を不動と名づけるが，それは八種の災患を離れるが故であり，その八種とは尋，伺，四受，入息，出息とである。」と説かれ，説一切有部も厳密には色界第四禅からを不動業と考えている。AKBh. p. 441 ll. 12—17, 『倶舎論』大正蔵29巻 p. 147・c, 『順正理論』大正蔵29巻 p. 762・c。

(18) AKBh. p. 227 l. 22～p. 228 l. 1, 『倶舎論』大正蔵29巻 p. 875・a, 『順正理論』大正蔵29巻 p. 568・a。

(19) AKBh. p. 139 l. 24～p. 140 l. 1, 『倶舎論』大正蔵29巻 p. 51・a。

(20) AKVy. p. 299 ll. 12—17。

(21) 大正蔵28巻 p. 607・a。

(22) 福行，非福行，不動行に関し考察した論文に，村上真完「諸行考（Ⅱ）—原始仏教の心身観—」『仏教研究』17号 pp. 52—4, 同名論文（Ⅲ）18号 pp. 48—50, 同名論文（Ⅳ）19号 pp. 84—94 がある。

(23) *Visuddhimagga* (PTS) p. 530 ll. 22—27, 他に *Vibhaṅga* p. 135, *Sāratthappakāsinī* Vol. II p. 78, *Sumaṅgalavilāsinī* Vol. III pp. 997—8。

(24) D. 219 b 5—7, P. 147 b 2—6. 註(7)拙稿 p. 7 を参照されたい。

(25) 『順正理論』大正蔵29巻 p. 568・a—b, 『顕宗論』29巻 p. 875・a。

(26) この原典は，不明な点を多く残すものの正量部所伝の梵文写本として残存すると報告された Saṅghatrāta 作の Abhidharmasamuccayakārikā の可能性がある。註(8)拙稿 pp. 31—3 を参照されたい。